

別紙 4

報告番 -	※ -	第
----------	--------	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目 沿岸域における小規模漁業管理の多様性

Local Diversity of Small-scale Fisheries Management
in Japan

氏 名 崎田 誠志郎

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、ローカルな沿岸域における慣習的・自主的な小規模漁業管理の存続・変容の多様なあり方とその背景の解明を目的としておこなわれた。小規模漁業はローカルな地域の社会・経済・文化と密接に関わりながら、それらの存続や多様な水産物の供給において重要な役割を果たしている。したがって、地域における小規模漁業管理のあり方について検討することは、小規模漁業を通じた自然—人間関係の解明につながる地理学的課題である。

I では、はじめに本研究において小規模漁業とその管理を扱うこと背景を述べ、前提となる小規模漁業の定義について日本の文脈を踏まえて検討した後、小規模漁業管理を中心とした資源管理研究の動向を複数の学問的潮流にわたって整理した。小規模漁業管理をめぐっては、零細な漁家経営の改善や資源の持続的利用の実現を念頭に置いた社会経済学的研究や、コモンズ論を参照しつつ慣習的な小規模漁業管理の実態を明らかにしてきた文化地理学的・人類学的研究が蓄積されてきた。その過程では、共同体基盤型管理 (CBM) や co-management といった管理形態が注目され、小規模漁業管理におけるローカルな主体の役割が強調されてきた一方で、近年はその限界や問題点も指摘されるようになってきた。これらの批判では、ローカルなコミュニティや資源管理の実態が有する多様性と複雑性に向き合い、関連する制度や主体との関係性の中で捉えていく必要性が提起されていた。

次に、日本漁業をめぐる近年の動向と、小規模漁業管理の制度的背景についての概

要を説明した。日本漁業は長期にわたる構造的不況や生産基盤の弱体化といった苦境に立たされており、わけても小規模漁業に従事する漁業者の減少や零細性が著しい。その中で、日本の小規模漁業管理は近世以来の慣習と集落構造を基盤としており、共同漁業権をはじめとする法制度的な裏付けのもとで自主的に実践されてきたことを解説した。その上で、小規模漁業管理をめぐる近年の問題として、1) 広域合併による漁協の変貌、2) 小規模漁業の縮退に伴う漁業権の内実の空洞化、3) 資源の保全と持続的利用に対する現行制度の有効性についての議論の3点を挙げ、さらに直近の漁業法改正における制度理念の転換について若干の検討を加えた。

IIでは、小規模漁業を含む日本の漁業管理制度に関する先行研究の動向と成果を把握するため、小規模漁業管理の制度的・組織的基盤とされてきた漁業法と漁協に着目して、主要な研究分野である経済学・社会学の文献を中心にレビューをおこなった。漁業法に関しては、漁業者らによる自主的な漁業管理の非合理性が指摘されたり、逆に漁業法を旗印とした総合的な沿岸域管理への拡張が標榜されたりして、漁業法の位置付けが揺らぎつつあることが示唆されていた。一方の漁協に関しては、漁協が有する漁業権管理団体的性格と経済団体的性格の矛盾の拡大や、漁協の広域合併や職能共同体化が進行し、実際の漁業管理を担う個別の漁業者集団との間に乖離が生じてきたことが明らかとされてきた。これらの研究成果から、小規模漁業管理を支える制度や組織の時代に応じた変化が示された。また、1970年代から1990年代にかけての資源管理型漁業に関する議論を検証した結果、実際に漁業管理の実践を担う地域の多様な実情に関する検討が欠落していたことが指摘された。

日本の小規模漁業管理の実態解明は主に海外からのまなざしを通じて主題化されてきたが、小規模漁業管理の地域的な多様性に焦点を当てた研究は少ない。こうした多様性の解明を担う地理学においても、小規模漁業とその管理に関する研究の蓄積は未だ乏しい。これらのことを踏まえ、本研究が取り組む課題として、「小規模漁業管理研究に対する地理学的アプローチ」と「地理学における小規模漁業管理研究の学問的意義」の2つを提示した。その上で、前者については、ミクロスケールでの小規模漁業管理の存続と変容の多様なあり方について解明し、その背景を考察することとした。後者については、本研究の成果が地理学における漁業研究や自然—人間関係をめぐる議論とどのように接合され、今後の研究の発展可能性へとつながっていくかを検討することとした。

IIIからVでは事例研究を通じて、各地における小規模漁業管理の実態とその背景を明らかにしていった。調査手法は、現地における漁業者らへの聞き取り調査と、漁協を

はじめとする関係機関での資料収集を主体とした。

Ⅲでは、和歌山県串本町に位置する和歌山東漁協下の 3 地区を事例に、漁協の広域化やローカルな小規模漁業の動態を踏まえながら、実際の小規模漁業管理がどのような制度的構造と主体間関係のもとで存続してきたかを明らかにした。度重なる漁協合併を経て、各地区の小規模漁業管理は、地区から分離独立した自主的管理組織によって担われるようになりつつあった。地区による自主的な小規模漁業管理は、公的な制度と関連づけられることでその正統性の補強を受けていた。すなわち、各地区の慣習を内容に反映し、なおかつあいまいさを多く含む公的な制度のもとで、地区の漁場管理は従来通りその自主性をいかに発揮することが可能となっていたのである。逆に、場合によっては、公的な制度の有する法的効力を利用するようにして地区の漁場管理の内容が公的な制度によって置き換えられ、結果的に地区の自主性が大きく後退しているような事態も生じていた。また、ミクروسケールにおける小規模漁業管理の動向は、地区間で一様に安定的でもなければ衰退しているものでもないことが判明した。漁業実態の動向や漁場環境の変動、漁業者の意向といった様々な要因との関連のもとで、各地区の小規模漁業管理は衰退、再編、強化といった多様な変容の過程を経てきたことが本章の結果として示された。

Ⅳでは、和歌山東漁協下の 11 地区で営まれるイセエビ刺網を事例として、日本の小規模漁業管理の特徴である CBM のミクロな多様性を質的・量的に明らかにするとともに、多様性をもたらす諸要因について考察した。調査の結果、イセエビ刺網の CBM の手法は、空間、時間、漁具漁法、参入の 4 つに分類された。これらの類型をもとに、地区間での CBM の比較分析を実施したところ、その内容や実践には地区間でさまざまに異なる特徴や共通点が認められた。CBM の多様化に影響を与える要因としては、1) 自然生態的条件、2) 漁業人口、3) 世代構成、4) 外部主体との関係、5) 組織の構造と管理機能、6) 入漁入会関係の 6 つが挙げられた。考察の結果、CBM の多様化は、こうした自然的社会的諸要因とその変動に対する漁家集団の応答の蓄積によってもたらされていることが明らかとなった。加えて、CBM の立ち上げや維持に関わる漁家集団の意図は多岐にわたっており、漁場利用の調整や資源保全だけでなく、漁家の協調性の維持向上、イセエビの利益の囲い込み、慣習的漁場利用の維持といった多様な意図が存在していた。こうした目的の多様性は CBM の変容・維持における漁家集団の判断に大きく影響することから、CBM の多様性を方向づける一因となっていた。

V では、小規模漁業に対する慣習的・自主的管理がおこなわれておらず、行政によ

る広域的管理体制のもとで漁業実態が急変した場合に、漁場の利用と管理をめぐって何が起こるのか、広域的枠組みのもとでローカルな小規模漁業はどこまで管理され得るのかを検証した。事例として取り上げた高知県の宝石サンゴ漁は、近年の国際的な宝石サンゴ価格の高騰を受けて急激に利益を上げるようになった。その結果、宝石サンゴの産地として知られる高知県柏島では、漁業者らによる宝石サンゴ漁への偏重と他の漁業の実質的放棄が生じており、ローカルな漁業地域の構造が一変していた。宝石サンゴ漁は近年まで従属的かつ縮退傾向にあったことから、漁業者ら自身による管理はあまりみられず、県の漁業調整規則に基づく広域的管理体制が主たる役割を担っていた。調査の結果、公的規制によって漁獲圧の過剰な増大は抑止されているものの、宝石サンゴ漁の操業スケールと管理スケールの齟齬によって、現行の体制による資源・漁場利用の管理には限界があることも指摘された。また、柏島における宝石サンゴ漁の活況は一過性の現象とも考えられるが、結果として生じた地域漁業の変容は、経済的ギャップの大きさゆえに不可逆的なものとなることが懸念された。ローカルな宝石サンゴ漁の持続性を検討する際には、ローカルな実態に目配りした管理構造の多層化と、宝石サンゴ漁だけに依存しない地域漁業全体の振興が鍵であると考察された。

VIでは、各章の結果に基づいて先に示した 2 つの問いに応えることで、本研究の成果と課題について総括した。「小規模漁業管理研究に対する地理学的アプローチ」に関わる検討では、事例研究を通じて明らかにしたミクロ・ローカルな地域における小規模漁業管理の多様なあり方を、「形態の多様性」と「機能の不均質性」という観点から考察した。その上で、漁業政策において小規模漁業を具体的な対象として捉え、その実態を考慮しながら政策を立案・推進していくことの重要性を指摘した。続いて、「地理学における小規模漁業管理研究の学問的意義」に関する検討では、小規模漁業管理の形態と機能だけでなく、それらが媒介する地域の自然—人間関係の考察や、小規模漁業管理を通じてみえてくる漁業地域の実相を地誌的に記述していくことの意義について省察した。最後に、地理学者間での対話の重要性に言及しつつ、本研究の知見を世界的な小規模漁業管理研究の潮流へと接合させていくための視座について展望した。